



飲んだくれて赤ら顔の住職、「私、牧子よ」としゃれてる長女、幸せ太りの
次女律子とその娘彩月、そしてそして黎子 今年元旦の家族の素顔です

楽音

佛歴二五六五 西歴二〇二二
令和四年四月号

発行 楽音寺 住職 内藤睦雄

電話 090-3140-3931 (携帯)

0553-47-3475 (お寺)

FAX 0553-47-3495

寺庭 090-8643-0852 (藤井牧子)

四・五月の楽音寺

四月一日 寺庭黎子葬儀 於ロゼア笛吹

八日 お釈迦様の誕生日

十・二十四日 坐禅会 朝六時三十分

五月八日・二十二日 坐禅会 朝六時三十分

本堂は一時物置になっていましたがだいぶ
きれいになりました。お参りください。

樂音寺寺庭内藤黎子は、三月二十七日早朝自宅にて亡くなりました。自宅といっても住まいにしていた庫裏は、昨年暮れに火災を越して消失してしまいましたから、入院しては果たせない家族との同居と、スムーズな介護支援のためだけに一時期借りた三部屋ほどの一軒家です。三年以上前から直腸がんと診断され、入院・手術・抗がん剤治療。放射線治療・人工肛門等々、あらゆる手を尽くしました。人並み以上に頑丈で元気な彼女は、それが為か転移も進み、痛みに耐え忍びました。いよいよとなって痛いことを口にしていましたが多くは我慢していたようです。私は鈍感ですから、痛いといわなければ安心した気になっていましたが、実はそれも彼女の思いや

りだったかと思うと申し訳なきでいっぱいになります。とても多くの方々に惜しんでいただき、悲しい中にも、広く深く生きてきた彼女を自慢したい気持ちです。ありがとうございました。

彼女の父親は敬虔なる

クリスチャン。岐阜の山内を開墾し大勢の家族を養うために池を掘り田畑を起こし、豚や鶏を飼い、そして

教会を建て、大自然の中で厳しくも夢のある信仰生活を営まれた方、私などとは同じ宗教者として連ねることなど到底できない器の大きな方でした。その娘ですから私自身が教え



られることは多くありました。

結婚した時は私がまだ音楽大学に籍を置いていたので、収入のほとんどは彼女に頼っていました。恐らく不安で大変な思いをしていました。たでしょうが不平を聞いたことはありません。その後楽音寺に入って、嫁として舅姑と同じし、予想以上のバトルはあったものの、母の持つ様々なノウハウを積極的に引き出し、それらをすべて自分のものにした黎子でした。家事の手際の良さ、動植物への愛情、すべての人への心配り等々、ぜひ娘たち、孫たちが引き継いでくれたら、黎子はきつと喜びます。

今月の掲示板

長閑さや

早き月日を 忘れたる

長閑と書いて「のどか」と読む、嬉しくなるような文字ですね。「ながいひま」と読む人がいても当たらずとも遠からず。最近はこの四季に二季の傾向があつて、極寒か酷暑、中間のいわゆる体に優しい秋と春が短いといわれています。炭太祇(たんだいぎ)という江戸中期の俳人の句ですが、蕪村とも交流があった人。当時ももしかして感覚的に春も秋もあつという間に過ぎてしまつと感じていたか、あるいは人生は短く、あつけないものだけ、春ののどかさのような幸せな瞬間もあつて、結構いい人生だったと感じていたかもしれませぬ。

「♪ラララ赤い花束
車に積んで 春が来た
来た 丘から町へ



すみれ買いましょ あの花売りの かわい瞳
に 春のゆめ」という歌が脳裏にポット出て
きました。紀友則の「ひさかたの 光のどけ
き春の日に しづ心なく花のちるらむ」ここ
にも「のどか」が見えている、長閑に穏やか
に。

臨濟寺専門道場へ出立

両親や大勢の親戚、友人知人のおかげで、
私たち二人はとてつもなく盛大な結婚式を
挙げていただきました。ところが実生活はと
いうと、楽器と下着だけもって女房のところ
へ転がり込んだ形。前述いたしましたが経済
的には「ひも」状態であることは自他ともに
認めるところ。その後谷あり谷ありの生活を
経て、山梨へ行こうと言い出した時、思い出

してみると、てっきり私に全面的に賛成同意
しているものとばかり信じていたものでし
た。あれほど結婚スタート時、苦勞をさせた
のに話し合ってきたつもりでも十分ではな
かったか、彼女の身をきちんと考えてやれな
かったかと、それこそ出発前夜になって思い
悩むことになりました。青雲の志とか宗旨の
蘊奥を究める、どころではない、以前は肩ま
であったのに、刈って無くなってしまった後
ろ髪をひかれる始末となったところです。道
場への出発当日天気予報は大雪でした。

編集後記

痛い膝を何とかなだめすかし、すつと立ち上がっ
て、多少強がりですが「ご心配なく」と言いながら、
前に進んでまいります。よろしくお願いいたします。